

「ダムを作るヒト、塀の上で歌うヒト」

Live Report

Text by Naomi Toriumi

kashi no kai

「今度、かしぶち君が大阪でソロライブをやるそうです。かつて、東京でのソロライブを聴いたけれど、それはもうマニアックな選曲でね(笑)。高校時代に何かのコンクールで受賞した曲とか、はちみつばい時代にボツになった曲とかを演るんだけど、いったい誰が分かるんだろう(笑)今回はライダーズの曲も演るみたいですから、また違ったステージになるんじゃないでしょうか。」

(「THE SUZUKI with 栗コーダーカルテット」のステージ上での慶一氏のMCより [10/17/98 心斎橋クアトロ])

「ボクのユメがジツゲンしました」

こんなMCから始まったライブは、終始、ステージから幸福感が溢れ出ていた。最近のライダーズのライブでのかしぶちさんは、いきなりハンドマイクをもたされて、少し戸惑い気味に歌っているように見受けられる。けれども、今回のステージは、はやる気持ちを抑えるかのようにして、時折、サイドテーブルに置かれたコーヒーカップを手に取り、ペースを整えながら歌う。

ライブ中盤、「君には宇宙船がある」をプロデュースした ya-to-i の山本精一氏(ボアダムズ)をステージに迎えた。「君には宇宙船がある」は、その歌詞が21世紀の地球観を先取りしているにも関わらず、懐かしいメロディーを携えた不思議な曲だ。この曲を無重力空間の彼方に放ってしまったアレンジも良くて、聴者に上昇感覚と下降感覚とを同時に与えることに成功している。少し緊張気味の山本氏をリードするかのようにして、ツインギターでもってこの曲が演奏される。浮遊感溢れるアレンジを脱ぎ捨てたこの曲が、アコースティックで演奏されることにより、地上的な懐かしさが増す。

アンコールラストは「D/P」。

かしぶちさんが歌うこの世界の有り様に、懐かしい既視観があるというわけでもなく、ことさら共感できるというわけでもない。ただ、その世界の美しさに圧倒されている。ライダーズの美意識と宇宙観は、かしぶちさんのそれに内包されていると考えるのだけれど、そう仮定するならば、こんな絵を描くことができる。街に作られてしまったがために、用途を失ったダムを塀に仕立てて、その上で歌っているのが慶一さんではないかと。

かしぶちさんのライブの約1ヶ月後に、所同じくして慶一さんのライブ(98/11/11 大阪バナナホール)を聴いた。「ボクのリビング・ルームにいらしたつもりでお聴きください」と語る慶一さんのライブは、計算され尽くした構成の中、緊張感が張り詰めていた。しかも、宅録現場に立ち会っているようで、かつてのかしぶちさんのライブ(03/08/98 下北沢ラ・カーニャ)と比べものにならない程、マニアックだったことはいうまでもない。そう、アンコール・ラストは「塀の上で」だった。

ムーンライダーズという巨大な劇場の中では、かしぶちさんも慶一さんも演出しているから、騙されてはいけない。劇場の栈敷席ではなく、軒のかかった路地裏で聴いてみたい音楽がある。スタンドグラスの光でなく、ミラーボールやネオンの光で眺めたい時がある。

今夏の「月面サマーツアー」の神戸で、かしぶちさんにエスコートされ、一緒に踊っていたのだけれども、今回のソロライブで、かしぶち哲郎というヒトに初めて触れたような気がする。(終)

HP 掲載に当たりオリジナル原稿より改行位置変更させて頂きました。
(櫻の会 KRAFT.WARTZ)